

R e : C R E A T O R S ~白夜叉、創造主の世界へ~

平山雑賀

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『銀魂』の実写映画化を祝つて仲間と宴会をしていた坂田銀時だったが、目が覚めると体が……、

「小〇匁になつてるううううううつ?!」

軍服の姫君の手によつて原作者（ゴリラ）がいる世界に来てしまつた銀時は、果たして元の世界に戻ることができるのだろうか？

※オリジナル展開有り

※原作セリフ抜粋有り

目 次

第一訓	実写化は期待を五割のみ持て！	1
第二訓	人間関係は第一印象からが大事！	4
第三訓	短所は長所と同様に必要な個性！	7
第四訓	人の字は支える者と支えられる者がいて成り立つ！	12
第五訓	人に指を指して笑うと、残り指は自分を指している！	17
第六訓	たつた一度の人生は一期一会を大切に！	21
第七訓	人間、見た目は中身以上に大事！	27
第八訓	ご飯はよく噛んで食べましょう！	33
第九訓	その場の勢いに乗つて行動しない！	38
第十訓	結婚してもしなくても男には墓場！	41
第十一訓	口ボットは男の子のロマンで異論は無い！	49
第十二訓	ガチャで失ったお金は戻らない！	54
第十三訓	優しいよりも、強いよりも、自分らしく。	60

第一訓 実写化は期待を五割のみ持て！

「あつ、頭痛え……」

正午前、とある公園のベンチにて一人の男が目を覚ました。腰の横に木刀を差した、黒のジャージの上に白い着物を崩して着た彼は、パーマな白い髪を搔きながら周りを見回し、

「……こ、どこだ？」

自身が知らない場所にいる事に気付く。

「酒飲み過ぎて変なとこ来ちまつたか？ まあ、夜までには家に戻りやいいか」

男は大して気にする素振りはなく、取り合えずとして顔を洗いに公園内にある公衆トイレへと向かった。

しかし、

「……え？」

洗面台にて寝惚けた顔を洗った男は、前にある鏡を見て啞然とする。

顔を触り、叩き、つねつたりし、再度鏡を見つめなおして、

「おつ、小〇旬になつとるううううううつ?!」

自分に起きた異常事態にようやく察したのであつた。

「えつ、何これ？ 新手のドッキリ？ 銀さん、よつた勢いで整形しちゃつた?!」

男は鏡を何度も見直したのち身体中をまさぐつて、

「ぎつ、銀さんの銀さんが、小〇旬の小〇旬になつとるううううつ?!」

ズボンの中を覗くと自身に起きた変化が顔だけでないと理解する。「ありえねえ……。まさか、銀さんの欲望が原因で演者さんと体が入れ変わっちゃつた？ 前前世で君の名は?!」

この事態に混乱した男は、一度大きく息を吸つてゆつくりと吐き出した。

「冷静になれ、坂田銀時。 少しずつ思い出せ、坂田銀時つ。 昨日な

にがあつて俺のナニが小〇旬のナニに、なつた？」

男は、昨夜から今にかけての出来事を一つずつ思い出す。

「確かに、アイツらと一緒に実写映画化祝つて宴会開いて、そんで……」

だが、そんな男の鮮明になりつつあつた記憶は、突如として響いた連続する爆発音により搔き消された。

男はトイレから飛び出すとすぐ近くの場所で、黒煙が上がっているのを確認する。

「たつく誰だよ、人が必死こいて頭ん中を整理してる時に……っ！」

悪態をつきながらも、男は腰の木刀に手をあててその場所へと走り出した。

○ ○ ○

「止めて！ 怪我を負わせるつもり何てなかつたの！ そうまでして戦うなんてしたくないっ！」

「甘えないで！」

魔法少女マミカの言葉に対し、反論する赤毛の女戦士セレジアであつたが、その体は満身創痍であり、次に一撃を食らえばひとたまりもない。

「お願ひ！ おとなしく話を聞いて！ でないと……」

しかし、マミカは感情的な行動により追撃を行う。両手で持つステッキの先に、先ほどまでセレジアを傷めつけていたハート型の光弾が放出されます。

「マジカルスプラッシュユ……」

「セレジアさ……っ?!」

なんの力もない傍観者の颯太が叫ぶ瞬間、一つの白い影がマミカに飛びかかつた。

攻撃寸前で乱入者に気付いたマミカだつたが、手に持つステッキは横殴りによる強い衝撃により弾き飛ばされる。マミカは、手に木刀を持ちもう一方の拳をこちらに振りかざそうとする存在の姿に、白い鬼を幻視して倒れた。

その一瞬の出来事にその場いた者達は言葉を失うが、

「たつく、ギャーギャーと騒がしいんだよ中2病ですか、この女郎」

その一連の原因である男の氣だるげな発言に、颯太はまさか、と口

ざさむ。

マミ力を横合いから倒した男に見覚えがあつた。木刀を手に持ち、黒ジャージの上に白い着物を崩して着た、白髪のパーマの長身。「週刊少年ジャンプの『銀魂』の主人公、坂田銀時……っ！」週間連載十週年となり、今年の夏に実写映画化が決まつたキャラクターが、彼ら同様に現実に現れたのだ。

第二訓 人間関係は第一印象からが大事！

「……でつ、誰かこの状況を説明できる奴いる？」

銀時は首裏を搔きつつ、破壊跡が痛々しい広場を見回す。 目に入るのは、先ほど銀時が殴りとばした魔法少女の格好をしたツインテールの少女。 その魔法少女に先ほどまで怪我を負わされていた赤毛の女戦士に、その後方に控えるローブを身に付けたショートボブの白髪の女。 もの影に隠れ先ほどからこちらを傍観するメガネをかけた少年と中年の男二人組に……、

「たつく、人の出番取つてんじやねえよ、オツサン」

一つの若い声が皆の視線を奪つた。 女戦士のすぐ横に現れた一人の青年、黒い木刀を手にサングラスをかけた長身である。

「こつぴでえな、此処は。 そのガキの世界とは構造が違うみたいだし無理ねえけど」

「おい、俺と同じように木刀持つてるお前。 赤いズボンを股ぐらまでピッチリと上げやがつて。 足が短い銀さんの嫌がらせ？ つか、お前見えてると知り合いのドS警官がチラつくんだけど」

ふと、男二人組を横目にした銀時は、少年が何かを口ずさむのを目撃した。

……何か知つてやがんな。

「おい、よそ見すんなや、オツサン」

「オツサン言うな。 俺は……」

自分の名を伝えようとした銀時は、上から馬の嘶く声を耳にする。空を見ると、宙に光の翼を生やした白馬が飛んでおり、

「そこをどけ、下郎っ！」

その上に何かが跨がっていた。

騎士だ。 長い金糸の髪を後ろに束ねた、厳つい鎧を身に纏つた女騎士だ。

女騎士は右手に持つ西洋の馬上槍を構え、銀時を目掛けて特攻する。

「新手かよつ！」

銀時は木刀を斜めに振り降ろおろし槍の矛先を受け流すも、女騎士は騎馬を旋回させ再度銀時を狙う。

そして銀時もまた武器を構える寸前、

「じゃあ、俺から自己紹介するか」

青年が木刀を女騎士へと向けた。

「これは神木黒凧丸。 そんでもつて……」

青年の背後に青白い透明な人影が現れる。

薙刀を手にした女武

者だ。 その光景に銀時は、

「スッ、スタンドだとお?!」

「スタンドじゃねえ！ こいつは俺の相棒、『板額』だ！」

青年の声に応じ、女武者『板額』は女騎士へと襲いかかつた。 薙刀による一閃を、女騎士は手にしている槍の先を下に向け縦にしひだ。

だが、

「これはテレビ通販で買つた木刀、『洞爺湖』」

それはもう一方の攻撃を見過ごす事となつた。

「そして俺は、『万事屋』の坂田銀時だっ！」

銀時による胴の一撃は見事に決まり、女騎士は馬上から転がり落ちる。

「おっ、おのれえ……っ！」

女騎士は直ぐに態勢を立て直し、倒れていた魔法少女を抱えて銀時達から距離をおいた。 その瞬間、彼らを見る女騎士の憤怒の表情は美顔ゆえに怖さを際立たせる。

「アツ、アリスちゃん……」

「マミカ、ここから離脱する」

意識を覚ます魔法少女を確認した女騎士は、舞い戻ってきた馬に跨がり彼女と共に上空へ飛び去つた。

「あつちやー。 オッサン、あんた美人に嫌われちまつたな」

「うつせえ、悪ガキ。 今度はてめえの腹を殴つぞ」

「おお怖つ」

ケラケラと笑う青年を無視し、銀時は怪我を負っている赤毛の少女の下へ走った。彼女に声をかける銀時であったが、その返答に対し剣を向けられ、

「安心しろ。少なくともボロボロなお前さんを傷つけるつもりは無い」

ため息をつき、そつと手を差し伸ばす。

「取り合えず、こつから離れんぞ。人が集まってきた」

「……解つたわ」

赤毛の女戦士セレジアは銀時の手を取り立ち上がった。

○ ○ ○

都市部から少し離れた廃墟にて、黒い軍服の少女はある本を読んでいた。

「坂田銀時。創造主によつて作られた物語で、己が創造物だと理解しながら生きる存在」

彼女が手にしているのは漫画、『銀魂』と題が書かれているものである。

「何故お前はそれを受け入れられる？あれほど悲惨な過去を創造主によつて描かれて、何故笑つていられる」

軍服の少女はそれを宙に放り投げ、

「気に入らんな」

自分を中心には無数の軍刀を召喚し、本を射ぬいた。

「この享楽の神々どもの恐るべき世界で、お前がどう向き合うか見物だな」

次々に放たれた軍刀によりバラバラとなつた本は、紙吹雪となつて少女の上を舞う。

「神々の地に、制裁を……」

第三訓 短所は長所と同様に必要な個性！

「本気……かよ……」

広場から遠くに離れた場所にあるファミレスにて逃げおおせた銀時は、

「こゝつてつまり、原作者達がいる世界なのかよ?!」

コンビニで買つた週刊少年ジャンプの表紙に写るてめえを見て驚きを露にした。

「私たちは彼らを『創造主』と呼んでるけどね。それで、自分が作り物の世界の登場人物だと知つて、どんな気持ちかしら?」
少しついジワルそうな顔で、彼に向かいのテーブル席に座るセレジアだつたが、

「べつに、まあ無事に元の世界に戻りやどうでもいいけど」

先ほどとは売つてかわつて、買ったジャンプを読み出す銀時を見て、吠えるように訴える。

「何でよ?! 自分が誰かの手によつて造られたつて知つたら、もつと他に……ツ」

広場にて受けた怪我の傷みが、セレジアの口を閉ざす。

「すまない、回復魔法は私の設定の範囲外」

「セレジアさん、怪我してるんですから大声を出さないほうがいいですよ。一度病院で診て貰つたら……」

彼女の隣りに座るメテオラと、通路を挟んだ隣りのテーブル席に座る颯太はセレジアの身を案じ、

「大丈夫よ、私はこの世界の人達と違つて頑丈だから。……『創造主』様のおかげでね」

セレジアは少し睨むように、颯太に向かいに座る松原を見た。

「しかし、セレジア殿の意見も最も」

メテオラはセレジアの気持ちを代弁する。

「私も彼女も、自分達が『創造主』達によつて作られた物語の登場人物である事に対して、複雑な気持ちがある。坂田殿、貴方は自身が漫画と呼ばれる本の登場人物である事に対して、何もないつと言うのは

変ではないだろうか？」

「いや、俺、物心ついた時からてめえが漫画の主人公だつて知つてたし」

「……は？」

銀時の言葉にメテオラが目を点になると、

「あの、彼は皆さんのお話とは違つて特殊なんですよ」

颯太はそんな彼女に説明を行つた。

「彼が、坂田銀時が登場する漫画『銀魂』は、こつちの世界の時事や人物をネタにして話を描かれたり、酷い時には関係のない別の『創造主』が描いた物語を模倣した話があつたりするんですよ」

「パクリじやねえ、オマージュだ。お前詳しいな、読者ファンか？ 握手する？ 今なら銀さん兼小〇旬だから二重にお得だぞ」

「どつちにしても、あんたの世界が常識外れなのは解つたわ」

「ふーん、随分と面白え世界から来たんだな、銀時のオツサンは」

銀時の隣、窓際の席に座る弥勒寺優夜は注文した料理を口にしつつ、

「いやあ旨えな。こつちに来てから一食も食べてなくてさ。

まあ、俺の世界とは金銭が共通してんだが、この先何があるか解んねえだろ？」

「あんたの方はだいたいの経緯は、もう解つてんのか？」

松原の問いに弥勒寺は食事の手を止め、

「俺らはその『創造主』つてやつに創られた世界の人間だつてな。笑うわ、翔の奴に教えたら、あいつどんな顔すつかな……」

「翔つて？」

「『あつち』にいる、俺の遊び友達だよ」

「原作、『閉鎖区 under ground —dark night —』の主人公です」

松原にそつと耳打ちする颯太をよそに、メテオラは話を続ける。

「貴方方の所にも、軍服の少女は来たの？」

「軍服？」

その言葉に銀時は漫画から彼女に視線を移し、

「俺がこつちに来て、最初に会ったのはお前らなんだが」

「俺ア会つたよ。三日くらい前にこつちに来た際、最初にな」

パフェに伸ばした手を銀時に叩かれた弥勒寺は舌打ちし、

「やつたら上から目線で喋る高慢ちきなガキだ。糞ムカつくオヤジと一緒に来やがつたんで、そのまま喧嘩になつてそれつきりだが」「オヤジだつて？」

松原は新たに出た人物に眉をひそめる。

「同類だろうな。こつちの世界じや、宙に浮ける奴なんていねえだろ？」

「俺の世界にも、首を荒縄でフォーコリフトして宙に浮く奴いっけど、違うだろうな」

「坂田殿、それは宙ではなく天に浮いてるのではないだろうか？」

「あんた、本当にどんな世界から来たのよ」

気にせずパフェを食べ出す銀時にメテオラとセレジアは突っ込みを入れ、

「話を戻すぜ。あの軍服のガキはこの世界を神の世界だと言つた。言葉にすりや何でも作り上げられる世界だつてな。俺は描いた『創造主』さえ探し出せば作り替えるのは簡単だとほざいてやがつた」

「あなたは、それを信じなかつたの？」

『創造主』を捻り上げて世界を変える？ああ、そうやつて楽しい世界に創り直すのも悪くねえ」

けどよ、

「誰かさんが作つた檻ん中で飼われてゐのを解つちまつた今、てめえの虫がご心地よくするのつて意味あんのか？」

ふと、弥勒寺は窓の向こう側を歩く人々に目を移し、

「別に、『創造主』様に言いたい事が無えわけでもないんだが、虫がごは虫がごで気に入つてんだ。ダチも仲間も、それから翔の野郎も

……」

「そいつに関しちや、俺も同感だな」

空に鳴つたパフェの器から手を離し、テーブルに置いてたジャンプ

に添えて、

「てめえや、てめえのダチや世界が誰かの手で創られたとしてもよ、そこで過ごした経験や思い出は造り物じゃねえんだ。泣きてえほど楽しかった事も、笑つちまうほど苦しかった事にも、言葉にしてえ感動も、言葉にできねえ絶望も、てめえにとつて大切な本物なんだよ。そいつをてめえの我が儘で変えちまう事は、それを全部裏切ることに他ならねえ」

厚みのある強い声と鋭い目に、対面するセレジアは唾をのみ、「まつ、もし変えられるなら、学校の給食のメニューにチョコレートパフエを加えるのも良いかもな。いや、ここは現実的に俺の糖尿病を完治して貰うべきだらうか……」

「急にシリアルスな雰囲気をぶち怖さないでくれない」

「うつせえな、こちとらこの設定のせいで一週間に一回しかパフエ食べられねえんだよ！ よくありがちな異性の恋愛感情に関してニブイクせに、T○ラブるめいた行為を及ぼすラノベ主人公のありがちな短所とは別に、私生活問題なんだよ、こつちは！」

「そういうや、翔も女とよく揉めてたなあ」

「セレジア、どうしましたか？」

「ごめんなさい、ちよつと自分の世界の事を思い出して…」

頭を抱えるセレジアに颯太はある事に気付き、

「主人公のカロンさん、ニブかつたですもんね」

「それに関しては作者である俺の責任だが、謝らねえぞ」

「このやりとりを見た弥勒寺は成る程と呟き、

「そこのオッサンは嬢ちゃんの『創造主』か。試してみたか？」

「なにを？」

セレジアの問いに弥勒寺は笑つて、

「決まつてんだろ、『改變』つてやつだよ」

第四訓 人の字は支える者と支えられる者がいて成り立つ！

「あじやらかもくれん…」

弥勒寺と別れた後、銀時達はセレジアの創造主である松原の仕事場へおもむき、弥勒寺の言つていた設定の改変を試みていた。

「きゅうらいす!!」

仕事場のリビングにて剣をふりかざし、自身の『造物主』が新たに書いた炎の詠唱呪文を唱えるセレジアだつたが、

「あじやらかもくれん、きゅうらいす！ きゅうらいす…つ！ あー、もう！」

何も起ららない現状に苛立た始める。

「やつば何も起きないな」

「今気付いたんですけど、もし成功したらこの部屋燃えちゃいませんかね」

「すまない、そこは気付くべきだつた」

「メラ！ メラミ！ メラゾーマ！ はいだらー！ はいだらー！ らりるれ火事だー!!」

「おい、この女戦士、目的変えて家焼こうとしてつぞ。 お前のキャラクター、一つ目の異星人に洗脳されたりしてねえよな？ 頭の中に爆弾とか入つてねえよな？」

「セレジア、一回止めて」

松原は、適当に呪文を唱えだすセレジアを静止させるメテオラ達を観察^みて、

「絵とか、用意した方がいいかね」

「絵、ですか？」

その言葉に颶太は反応する。

「ここに戻る前に、『フォーゲル・シユヴバリエ』の作画やつてくれてる人に連絡しといたんだよ。 そろそろ来る頃だと思うけど」「へえ、この絵を描いた奴な」

銀時はテーブルに置かれてあつたライトノベルの表紙を眺めて、
「俺も、一度くれえはこんな感じの絵で描かれたかつたわ」

「あんたの本の絵、結構見た目が芋臭いわよね」

「芋臭えとか言うなよ！ こっちの創造主様はな、一週間に十数ページ
描かなきやいけねえ苦行を十年間頑張つてんだぞつ！ ぽつと出
の小娘が調子ぶつこいてんじやねえぞ、てめえ?!」

「なによ、ヤル気？」

「ちよつ、ちよつと喧嘩は止めて下さい！」

口論し合う二人を颶太が間で抑える中、玄関のチャイムが鳴り出
す。

○ ○ ○

「えつと、つまり、私は絵を描いたらいいんですね？」

ラフな私服姿のメガネをかけた女性、『フォーゲル・シユバリエ』の
作画担当「まりね」は、キャラクター達をチラ見しつつ問う。

「そうだ。弥勒寺つて奴が言つてた『改変』をやつてみたい」

「現状を早期的に解決する手段を探るため、あなたの力が必要。
力を貸してほしい」

「いつ、いえ、大丈夫ですよ！ それで何を描いたら……」

メテオラはコピーしておいた詠唱呪文が書かれた紙をまゆみに見
せる。

「えつ…と、この文章に前後はないんですか？」

「あつた方が創りやすいなら、今書く」

「あつ、ちよつと待つた」

パソコンに向かい、文章を作り出そうとする松原を銀時は呼び止
め、

「どうせだつたら回復呪文に変えねえか？ この先切つてはつたりす
んなら、そつちの方が良いし。まだ怪我が痛むんだろう、セレジア」
「余計なお世話よ、遊び人」

「遊び人舐めんじやねえ?! レベル20越えたら賢者に転職できんじ
ぞ！ それ以前に銀さんは既に賢者だしつつ！」

▼残念。 銀時殿には賢さが足りない」

銀時殿には賢さが足りない」

「うつせえ！」

松原が再び作業に戻った間にまりねは絵のイメージを深めるため、「セレジアさん、あの、少し服とか見せて貰つていいですか？」

「ええ、良いわよ」

緊張しながら問うまりねに、セレジアは了承の返事をし立ち上がる。まるねはその周囲を見て回りながら少し興奮気味に服を観察する。

「凄い、本物つてこうなつてるんだ。へえ、ここはこうやつて刺繡されてるんだ、凄くキレイ」

「なつ、なんか恥ずかしくなるわね」

「なるほど、白か」

「あんたはどさくさに紛れて何してんのよ?!」

まりねに混じつて服を触る銀時を蹴るセレジア。

「いやあ、俺も自分以外のキャラクターの服装とか興味あつてよ」「自分の体でもまさぐつてなさいよ、この変態！」

「じゃあ、そうするわ。……どう思う、この銀さんの小〇匁」

「ユニーク」

「本当にになにしてんのよっ?!」

メテオラにズボンの中身を確認して貰う銀時にツッコむセレジア。そんな光景を見て颯太は、メテオラがこつちの世界以上に別のなにかに毒されつつある事に戦慄しだす。

「よし出来た」

コピー機から出た新たな用紙の文章を読んだまりねは、画用紙に絵の下書きを描いていく。

「凄い、私がどんどん描かれてく！」

「リアルバクマンつてこんな感じなんだな、後で俺も描いて貰おう」

まりねの手で描かれていくキャラクターの絵に感銘を受ける銀時達の横で、

「僕も、あんなに綺麗に描けたら、いいな……」

颯太もまた憧れと羨望の目付きで見ていた。

「随分とよくみてんだな」

「僕も、絵を描いてますから、……下手ですけど」

下書きを完成させたまりねは、松原の席を代わりに座りPCで絵の色付けを始める。

これから長くなりそうだと氣付いた銀時達は、邪魔にならないようその場から離れ、

「この世界でも、夕日が綺麗なのは変わらないのね」

セレジアはベランダに出て日の光を眺めた。そして銀時も彼女の横に立ち、

「俺の世界でよく見つけど、肌で感じる暖かさとか違えな。 颮太も来いよ」

銀時に誘われて、二人の間に立つ颯太。

……思えば、夕日を眺めるのは久し振りだ。

「お前、いくつだっけ？」

「……と、十六歳、ですけど」

「神楽と同じくれえか。まあ、大丈夫だろ。 時間はたっぷりあつから、頑張れよ」

「えつ？」

「さつき、絵を描いてるって言つたでしょ」

セレジアの言葉に颯太は沈黙し、

「あの……」

静寂した空気に耐えられなかつたのか思わず口を開く。

「二人は、……その、どうやつても追い付けなくて、届かなくて、そういうのありますか？」

その問いを先に答えたのは、腰に下げてある木刀に手を乗せた銀時だつた。

「俺はよ、もの心付いた時から力しかなかつた。^{これ}創られた世界が問題だつたとか、今さら文句言うつもりはねえよ。これを振りかざして今を生きるのに必死になつてた俺を、救つてくれた人がいた。今でもあの時の事を覚えてる」

……あの日も夕焼けだつたつけな、とベランダの手すりに腕をかける銀時。

「俺はそいつと……先生と出会つて憧れて、武士になろうつて思つたよ。 そしたら先生はこう言つた」

『武士道とは何も國や主君に忠節を尽くす事だけを指すのではなく、弱き己を律し、強き己に近づこうとする意志、自分なりの美意識に沿い精進するその志をさすのです』

「自分が心の底から成したいと思う道を進めつて、な」

「私も、大切な人に教えられたから」

次いで、セレジアも口を開く。

「勝負しなきやいけない時はある。 命をかけて優劣が生まれる瞬間は、確かにある。 でもね颯太君、勘違いしちゃいけないのは、一から十まで何でも勝敗を着ける理由なんて無いって事よ」

つまり、

「貴方が一生懸命やつている事を知つてるのは貴方だけ。 自分に嘘を吐いていないと自分自身に誓えるのなら、何を言われても気にしないでいい。 最善を尽くして駄目なら、そこから先は貴方一人じやどうにもならなかつたつて事よ。 そんな事を悔やんでも意味ないでしょ？だから、貴方の歩幅で気にせずやればいいの」

『犀の角の様に、只一人歩め』

リビングの椅子にてライトノベルを手に呑いたメテオラの言葉にセレジアは頬を指で搔き、

「本やアニメなつてるから、みんな知つてるわよね。 カロンもいつか同じ事を言つてたわ」

「できるさ、颯太。 お前が諦めねえかぎり、お前だつてこここの神様なんだぜ」

銀時に軽く背中を叩かれた颯太は、心の中にあつた重いものが少し軽くなつた気持ちになり、

「……ありがとうございます」

『あの日』以来から久し振りに、少し笑えた気がした。

第五訓 人に指を指して笑うと、残り指は自分を指している！

「出来た！」

銀時達はまりねの描いたイラストに興奮の声を漏らした。イラストには、和服風に変化した衣装を着たセレジアが、強化された剣を手に炎を操る姿が描かれており、

「これ、私？ すつゞくカツコイイ！」

「これが、プロ絵か……」

「羨ましいぜ、目立つ特殊能力とか必殺技とか。待てよ、今の俺ならかめはめ波が打てる可能性が……」

「銀時殿、色んな意味でそれはやめてほしい」

何かを閃いた銀時を押し留めるメテオラ。

「回復魔法はイメージしづらいし、コイツの性格に合わなそうだったから最初に考えてた炎の呪文にしといた」

「セレジア、さつそく試してみて」

セレジアは再び剣を取り、自らの『創造主』である松原が考えた呪文を唱える。

「あじやらかもくれん、きゅうらいす！」

しかし、何らかの事象も起きず、リビングには沈黙が響いた。

「やつぱり、ダメみたいですね」

「あの、私、何かしちゃいましたかね？」

「大丈夫よ、絵は綺麗に描かれてたし、問題があるとすれば『創造主』の方よ」

セレジアの発言に松原は口を尖らし、口論になりだす二人。

「あのさあ、言つて良い事と悪い事つてねえか？」

「何よ、もとはと言えばあんたが……」

「二人ともやめて」

それを抑えるメテオラを横目に、颯太はテーブルに置かれたイラストを再度眺める。

「けど、なんで出来なかつたんですかね？」原作者と作画担当が揃つていれば可能性は……」

「感じんな所がお前ら抜けてんだよ」

銀時の発言にセレジアは眉をひそめた。

「どういう事？」

「主人公兼ジャンプ愛読者である俺から言わせりや、ひとおしが足りねえんだよな」

銀時は買つっていた漫画雑誌を手に皆を見る。

「いいか、漫画とか小説とかはな、多くの人に見てくれなきや評価されねえし売れねえんだよ。」

「俺達が内輪で色々とアイデア出しても、それを読者が読まなきや意味がねえのさ」

「まあ確かに、俺の作品も評価されて売れて、今アニメにもなつてるからな」

「たぶん、弥勒寺が言つてた『改変』は、所謂後に付けた設定みてえなやつだな。『創造主』が物語のキャラクターに対して、”こいつにはこういう過去があつたんだ”と思つ付いて書き足して読者に認知させれば……」

「無かつた事が有つた事として書き変わる、恐ろしい話ね」

銀時の説明にセレジアは顔を強ばらせる。

「まあ、実際問題やつてみなきや解んねえからな、これは。それで、これからどうすんだ？」

松原の問ひに一同は互いの顔を見直すと、

「あつ、そうだ！」

まりねが何かを思い出しメテオラの方を向いた。

「メテオラさんの出てたゲームつて、『追憶のアヴァルケン』ですよね？ 私、そのゲーム会社でサブキャラの、デザインの仕事を受けた事があるんですよ。 連絡すればメテオラさんの創造主に会えるかもしれません」

「やつたじやない、メテオラ！」

セレジアはまるで自分の事のように喜びメテオラの手を握った。

「縁つて、簡単に繋がるんですね」

「この業界、案外せまいからな」

「いいじやねえか、一步前進出来そうでよ」

それを男達は微笑ましそうに眺める。

「それじやあ、明日一緒に行きましょ。 そう言えば、こっちに来てからどこにお住まいなんですか?」

「私達には寄る辺はない。 一度颶太殿の家に身を寄せているが、これ以上の衣食住の世話になる訳には……」

「じゃあ、私の所に来て下さい! 独り住まいですし、向こうの世界のお話、すぐ聞くたいです! セレジアさんも是非!」

「いいの? ありがとう、お世話になります」

「世話になんぜ」

『いや、あなたはそっち（松原の家）だから』

便乗する銀時に対し、女性陣は冷たく返す。

「松原殿、銀時殿をお願いします。 それと、まだこれからも試していない事がありますので、これからも協力してほしい」

「……もう巻き込まれちまつてるからな、別にいいさ」

【感謝】

「わりいな」

銀時と共に一礼したメテオラは、次に颶太へと顔を向けた。

「颶太殿、ここまで協力痛みいる」

「あの、これでお別れ、ですか?」

「いや、違う。『軍服の彼女』がこの世界の軸を開いたのが運命であるなら、あなたと私達が出会ったのは向かうべき宿命」

だから、

「颶太殿、まだあなたは此処にいるべき。 然るべき時に至るその時まで」

その言葉に身を固くする颶太の姿に、銀時は自身の仲間の影が重なつて見えた。

○ ○ ○

「ようこそ、神の世界へ。 己が願いを叶える同士として、君を歓迎し

よう」

都心部から少し離れた廃墟にて、軍服の少女は目の前の影に微笑む。

それに対し、影は火のような赤い目で彼女を見つめ返した。

「僕は、僕の世界で苦しむ人達を救いたい。 人種や価値感で区別して正義を吟う奴らを壊したい。^{正した} 間違っていたのは僕の物語じやなかつた……」

月明かりが影を照らし、左目と口をマスクで覆った白髪の少年の姿を鮮明にする。

「間違っているのはこの神々の世^世界^界だ」

第六訓　たつた一度の人生は一期一会を大切に！

「まさか、そんな事になつてたとはな」

メテオラの創造主である『追憶のアヴァルケン』のシナリオライターに会いに彼の職場へと向かつたメテオラ達であったのだが、「単車の事故でもう他界してるんですって」

自分の創造主が既にこの世に存在しない事実を知つたメテオラは、思い詰めた表情でその場をあとにし一人で何処かへ行つてしまつたと言う。

「それで、あんた達は一体今まで何をしてたわけ？」

リビングにて仁王立ちする鬼の形相のセレジアの前には、

「なあ、銀さんもう足が痺れてきたんだけど止めにしない？」

「短絡的だつた件については俺も悪いと思つてる。だから……」

「黙りなさい」

『はい』

正座する二人の大人、銀時と松原の贖罪の姿があり、床には複数枚のキヤバクラの名刺が散らばつていた。

「昨日、私達が帰つた後に、あんた達がどこで何をしてたかはこの際詳しく聞かないけど……」

セレジアは離れたテーブル席にて座る人物に指を差した。

それは湯飲みを手に一服する軽装の青い和服を身に纏つた美青年。その美しさはまるで古い歳月を歩んだ白磁器のような凄みが見てとれる。

実際、その隣の席で彼を目にし心打たれた女性、まりねの姿があつた。

「こういう事は早急に連絡しなさいよ！」

『本当にすんません』

○ ○ ○

昨日の夜、セレジア達が仕事場を離れた後、松原は銀時の誘いに乗つかつて共に夜の街を遊び歩いていた。

「いや、少しばかり気が楽になつたわ！」

「まつ、誘つておいて金があんま出せなかつどな」

「なあに、その顔のお陰で割り増しで特をしたから良い事よ」

キヤバクラを出て近場の飲み屋にて銀時は松原の愚痴を聞いていた。

「しかし、自分の描いたキャラクターが飛び出て来るなんてなあ。

あいつ、最初は俺のファン装つて接触してきたんだぞ？」

「それを鼻の下伸ばして騙されたのがお前つて訳だな」

「そこはまあ、変な詐欺にかかつちまつたけど、悪徳のヤツじゃないよ

りマシ……かねえ」

ビールグラスを手にする松原は少しある疑問を覚える。

「けど、何で一番最初にセレジアと会つたのが颯太君なんだ？ 普通に考えたら俺が最初になるよな？」

「メテオラの奴が、何か感づいていた見てえだな。 もしかしたら

……

「もしかしたら？」

「……いや、ただの一事だよ」

気にはせずお猪口を手にした銀時は一杯口にしようとするも、ふと手を止めた。

「おい、何か変な音しねえか？」

「そうか？ 僕にはよく聞こえねえけど……」

酔いが回つてからか耳鳴りだと松原は口にするも、銀時はその音が現実のものだと瞬時に理解する。

日本の現代社会では聞く事がない銃声だと……！

「上かつ！」

「ぐえつ?!」

直感的に、松原の襟首を掴み後方へ跳ぶように下がる銀時

。

瞬間、さつきまで二人が飲んでいた場所は、屋根を突き破つた何か

によつて激しい音と共に押し潰された。

「無事か、松原？」

「おつ、おう。 何なんだ一体？」

直ぐ様飲み屋を出た銀時は、屋根の上を跳ぶように走る人影とそれを飛んで追うもう一つの影を視認する。

「悪いけど松原、お前はここで待つてくれ」

「おい、もしかして今のつて……？」

「ああ、どう見ても……」

銀時は腰に下げていた木刀を抜き、影を追つて駆け出した。
〔登場人物の案件だな、コンチクシヨー〕

もぬけの殻である廃ビルの中に、二つの影が舞つていた。

一つは、軽装の青い和服を身に纏つた青年。

もう一人は、黒いコートの大柄な中年男性。

和服の青年は日本刀を手に、コートの男は銃を手に交戦し合う。
「銃は俺の生まれた時代にはなかつた代物だが、お前のはなかなかキテレツだな」

コンクリートの柱に隠れた和服の青年は笑つてそう呟くと、

「驚愕するのはこちらもだよ。」“擬人化”と言うのかね。 物に人の姿を与えるとは、とんだイカれた神がいたものだ

「はつはつはつ、生憎だがこの姿を俺に与えてくれたのは俺のあるじ審神者さねんしゃである。 700年近く活きてはいるが神様など一度も会つたことなどないぞ？」

「それについて心配することはない。 神々の地に来たならいざれ会えるだろう。 だが……」

コートの男は右手の銃の砲身をコンクリートの柱へと向かせる。
「まずはこの状況をどうにか打開いてみることだ」

放たれた銃弾は、コンクリートの柱を踏まれた空き缶のように押し潰し粉砕した。

だがその瞬間、和服の青年は柱の影から回避し、コートの男に特攻をかける。

それに対し二射目を構えるが、既に刀の切つ先はコートの男の間合いに入っていた。

「まだだつ！」

コートの男は拳銃を和服の男本人ではなく、彼の足下へと狙う。粉砕された足場に掬われ、振り下ろした刀が虚空を斬つた。和服の男はそのまま崩れた足場から墜ちだす。

その身動きが取れない状態をコートの男は狙い……、

「うおりやあああああっ!!」

しかし、突如として現れた銀時による木刀の一閃が、コートの男を妨げた。

殴られたコートの男は後方へと飛ばされるも、それを体で押さえ込む。

「たつく、硬えなあ。 毎日ご飯にボンドでもかけて喰つてんのかよ、バカヤロー」

「……野蛮だな、まさかとは思うが弥勒寺という若者の知り合いかね？」

「生憎様、スタンドなんて持つてねえよ。俺の武器はコイツだけだ」と、銀時は木刀の切つ先をコートの男へ向ける。

コートの男はメガネをかけ直し一息ついて、

「こうなつては、役目を果たせそうにないな。 すまないが、逃げさせてもらうぞ」

「させねえ……！」

再び木刀を構えなおし攻撃に転じる銀時。

「なつ?!」
[■■■■■■■■ツ!!]

横合いから現れた何かが銀時に襲いかかる。

その正体は赤い右眼を剥き出し、片目と口を布マスクで隠した白髪の少年。

しかし、少年には常人にはないものが生えていた。

黒い尻尾、いや触手だろうか、それは腰の後ろから大きく四つ生えており、一つの生き物として蠢き暴れだす。

「どこの人柱力だよ、てめえは……!?」

木刀の太刀捌きで身を防ぐ銀時だが、赤眼の少年は黒い尾を使い床、壁、天井を四方八方飛び回り、

「■■■■■■■■■■ツ!!」

「ではな、サムライ君」

「あっ、待ちやがれツ?!」

コートの男を掲つて夜の闇へと消えていった。

「はつはつはつ、逃げてしまつたか。しかし、妖怪も出るとは此所はおもしろいな」

銀時の背後、呑気な声で喋るのは先程までコートの男と戦っていた和服の青年である。

「てめえ、わざと逃がしただろ?」

「生憎と、こう見えて俺はジジイだからな。あまり無茶は出来ない性分なのだよ」

「そうかよ、コンニヤロー。俺は坂田銀時。ここに来ちまつたのは今日だ」

それで、

「てめえは一体何者だ?」

「ふむ……」

和服の青年は物腰柔らかに微笑み答えた。

「俺は三日月宗近。^者天下五剣の一つであり、この世で一番美しい刀と呼ばれてる物だ」

第七訓 人間、見た目は中身以上に大事！

「刀剣乱舞。 日本刀を擬人化したキャラクター達が登場するゲームで、三日月宗近はその看板キャラとして知名度が高いんですよ」

学校から戻ってきた颯太から、銀時達は新たに現れたキャラである三日月宗近について説明をうけつつも、

「やつべえ、ついに小〇旬と同等レベルのハンサムマスクが来ちまつたぜ。 この世界に来たキャラクター内、不動の二枚目キャラ一位の座が獲られちまう！」

「いや、あなたの場合は二枚目（笑）でしょ」

「さらに正確に言うと二枚目（借）だけどな」

「うるせえ、コンチクショーン」

セレジアと松原に突っ込まれた銀時は、リビングにてまりねに詰め寄られる三日月宗近を見る。、

「あの、写真つ、一緒に写真を撮つてもらつていいですか？」

「はつはつはつ、別に構わんよ」

少し豹変しているまりねに対し、気にもせず三日月宗近は彼女の希望に答えていた。

「まりねさん、私達があつた時より興奮してないかしら？」

「まさか、重度の刀剣乱舞ファンだつたなんてな」

「生んだ息子よりも、顔面に補修パテ塗り込んだ韓流スター応援するおばちゃんみてえなもんだろう？ 後少ししたら落ち着くだろうよ」

それよりも、

「昨日からまだ帰つてきてねえんだろ、メテオラが」

「大丈夫かしらね、メテオラ」

「ああゆう真面目そうな奴に限つて、折れやすいからな」

「松原さん！」

「……あつ、悪い」

少しづつ淀む空氣の中、三日月宗近は呑氣に笑つた。

「はつはつはつ、あまりそう思い詰めるものではない。 ほほ他人同士である我々が、そのメテオラと言う少女に思う所があつても、それ

をどう決めるかは彼女自身である」

故に、

「戻つて来た時は、温かく迎えてやればいい事だ」

「三日月……」

「なあに、ただの年功だよ」

すると玄関のチャイムがリビングに鳴り響く。

「行つてくる」

急ぎ足で玄関へと向かう松原だつたが、

「メテオラだつたか？」

黙つたまま戻つて来た彼の目は、どこか信じられないモノにでも遭遇したように思え……、

「皆、心配をかけた」

「何だよメテオラじや……」

そして現れたのは案の定メテオラだつた。

……何故か黒のとんがり帽子と黒いマント、眼帯を片目に着けた姿で。

「この通り、私は問題ない」

「問題ありまくりじゃあああ?!」

メテオラの珍妙な格好に驚愕する一同。しかし、彼女は氣にもせず話を続ける。

「セレジア、まりね、一日ほど音沙汰をいれず済まなかつた」

「いや、そのつ、メテオラよね？ 同じ顔をした別の誰かとかじやないわよね？」

「そう、私はメテオラではない……」

そして彼女は謎のキメポーズを決めて、

「私はメテみん！ 万里の図書館クンストヴンダーカンマの司書にして、ザルカザンの秘法を伝授する者なりつ！」

「すんませーんっ！ 今すぐ誰かタイムマシン見つけてくださーい？」

「メテオラ、ふざけないで戻つてきて?! 今すぐ電源を切つてもう一つの冒険の書をロードしなさい、早くっ！」

「はつはつはつ、愉快愉快」

助けを呼ぶ銀時に、メテオラの襟首を掴み揺さぶるセレジア。 そしてその光景をお茶請けにして笑う三日月宗近。

取り敢えずその場を納める為、颯太はメテオラに問う。

「その格好……なんなんですか、メテオラさん？」

「皆を動搖させる格好、どうよう？（動搖だけに）」

『……』

空気が、死んだ。

○ ○ ○ ○

「皆に心配をかけたので、少しでも気持ちを楽にして貰おうと思考してみた。 本当にすまない、謝罪する」

「いや、本当に。 頼むからそのまんまでいてくれ」

メテオラはまりねから借りてある私服に着替え、皆の前に座つた。

「心遣い感謝する。 そしてもう一つ謝罪したい。 私は貴殿方に黙つていた事がある」

真剣な表情でメテオラは三日月宗近を見る。

「それは極めて重要な事、初めて会う貴方にも聞いて欲しい」

「俺は構わないと、話したまえ」

そしてメテオラは話しを始めた。

「私は決めあぐねていた。 セレジア、実は私も貴女と同じように創造主に対し複雑な感情があつた」

「ここに来たキヤラクター達は、本心では皆そうだと思う」

セレジアが相槌を打つとメテオラは続けて話した

「貴女がここに来訪した最初の夜、貴女が会合した軍服の姫君に私が率先してリアクションをとらなかつた事には理由がある。 彼女が行おうとした事に確信が持てなかつたのも勿論だけど、それとは別の感情があつた」

それは、

「私と私の世界を創造したもの、いかなる眼差しでその世界を見ていたのか、その視点以下によつてこの世界に対する姿勢を決めようと考えていた」

「いい加減でも、性格の悪い人間でも私は構わない。しかし、自ら生んだ世界に真摯でない者が、そんな人間が世界を創造していたのなら、私のいた世界が殺戮と仮初めの希望だけが彩る、欠き割りの虚しい世界にいたしてしまう」

もしそうであれば、

「私はこの世界に流れ着いた異邦人、漂流者として、最期の時間までこの世界が滅びる様を観測しようと考えていた」

「世界が……」

「滅ぶう?!」

メテオラの発言に一同は驚くも、キャラクター達は黙つて話しを聞き続ける。

「……続けて」

「この世界は法則性を堅持するため、出来るだけ辻褷をあわせようとする作用がある」

「私やセレジア達はこの世界に適合するよう変換された。私達が二次元的な素体、ポリゴンなどでなく、颶太殿達と同じような姿に現界しているのは、この世界の辻褷合わせる能力、つまり『修復力』によるものが大きい」

銀時はそこでメテオラに挙手した。

「それじゃ、俺の体が小〇旬になつてるのは?」

「実写化と言う定義に基づいてその姿を模倣、コピ―したと考えられる」

だけれども、

「この世界に矛盾極まる新たな物語世界が、衝突し融合させ無事で済まされる弾力があるとは私は思っていない」

「私と貴殿方がこうやって干渉し合つてゐるのも、実はネガティブな状況を生む危険性が孕んでいる」

「そんな、僕達と話してるのでどうして……？」

松原はメテオラの察しに気付き、

「ようするにだ、この世界にいる筈のない人間が何かしてるだけで、い
ちいちこの世界は辻褄を合わせないといけない、そうゆう事だろ？」
「そう、しかも僕達は見ての通りこの世界に存在しない物理法則を無
視した能力をそのまま持ち越している。

世界の辻褄合わせが間に合つてないのか、世界の衝突が予想を越え
て影響しているのか」

とにかく、

「世界に対して私達が集まり結託して、このまま世界の衝突が統けば
……」

「統けば……？」

メテオラは重い口を開く。

「何処かで段数係数が限界を迎へ、法則を司る調和機構も決定的な破
綻をきたす。

そうなつた場合、他の世界を生み出す器官となつたこの世界もろとも、一度全てをリセットする瞬間を迎えるのではないかと、私は考
えていた

「私はそれを仮に、『大崩壊』と呼んでいる」

メテオラの話にキヤラクター達は合点がいった。

自分達がこの世界に来た以上、何があるとは薄々感じとつてはいた
のだ。

「あくまでこれは私の仮説、無闇に貴殿方を動搖させたくなかつた」
「それにもし本当にその日が訪れても、知らないままなら知らないま

ま、破滅を迎えるのも安らかにいられる」

「随分と安く見られたな、コンニヤロー」

「その非難は正当、貴殿方の尊嚴を傷付ける行為だつた」
「いいわよ、許す。 こうやって話してくれたんだから」

「それでメテオラ、お前はいつたいどうするのだ？」

三日月の問いにメテオラは答えた。

「私は自分の気持ちに決着を付ける為、ある事を試した」

すると、メテオラは手持ちであつた紙袋からあるものを取り出す。
それはゲームだった。 しかも、それは彼女がキャラクターとして登場してたものである。

「私は一日かけてこの『追憶のアヴァルケン』をプレイした、クリアまで」

第八訓　ご飯はよく噛んで食べましょう！

「私は昨日一晩かけて『追憶のアヴァルケン』をプレイした。クリアまで」

その言葉に一同は驚愕した。

「マジで？」

「一晩ですか、メテオラさん?!」

「私には無理。自分が出てる作品を見るなんて……」

メテオラは皆の反応に苦笑する。

「自分の与り知らぬ所で戯画化された私を見るのは、どうにも面映ゆいもの感じるが」

「既に鬼籍となつた彼の思考を追いかけるのであれば、彼の創つた作品を、彼が遊んで欲しかつた様に追体験する事が恐らく、最も近道であると思つたから。だから私は、傍観者として一度自分の世界へ戻つた」

「それで、どうだつたんだ？」

銀時の問いにメテオラは、

「ゲームは、とても面白かつた」

その表情は、もの静かな憂いを秘めた普段ものと違い、温かな日のような笑顔であつた。

それを見て銀時も「そうか」と言い笑う。

「それだけ？」

「それだけで十分。彼はとても纖細に、とても思慮深く、世界を作つていた。そこにある多くの者達の人生を、見えない所まで、細やかに気配りしている逃れ感じられた」

「私は多くの複製された『アヴァルケン』の中で、永劫の輪廻を繰り返す。そのゲームを遊ぶ人がいる限り、私は勇者にザルカザンの秘法を伝授し続けるだろう。滅びゆこうとする世界を救う為に、永遠に」

そして、

「私は考えた。その永劫を知つた今、私は私の世界と役割を受け入

れられるか。 その世界を創った者を受け入れられるか」

手に持つゲーム『追憶のアヴァルケン』を胸に抱き、笑みを浮かべるメテオラ。

「胸を張つて言おう。 私は、受け入れられる」

「私は自らの役割を永劫に務めよう。 自分の世界を離れ、改めて観測者として自らの世界を俯瞰して、信じるに能う価値があつたと確信できる」

「それがただの遊興であつたとしても、私の『創造主』が私の世界に込めて託したものは変わらない」

「彼は確かに私の世界を愛していた。 その世界を外側から愉しむ者達も、同じく愛していた。 ならば私は、彼の愛したものを見守りたい」 メテオラの独自を聞いて銀時達は顔を上げて頷き、彼女もまた頷き返した。

「私は決めた。 私の『創造主』がこの世界を愛していたのなら、私は世界を守る。 それが『彼女』か、他の何かの意図に囚われていたとしても、世界の衝突を防ぎその全てを欺くある所へ戻す」

メテオラは決意に満ちた表情を見せ、

「私が『アヴァルケン』で、滅びゆく世界を繋ぎ止めたようとした様に」

○ ○ ○ ○

メテオラの独白が終わり、最初に口を開いたのはセレジアだった。 彼女もまた新たに決意を固めており、

「メテオラ、貴女の世界の勇者の代わりになれるか解らないけど、全力で協力するわ。 私は帰らなきやいけないもの、カロンや皆が待つてる世界にね」

「俺も同じだぜ、メテオラ」

次に応えたのは銀時である。

「俺の世界には、俺の意思を継いでる奴等がいつけど、主人公様がいなきや話が盛り上がらねえからな」

それに、

「てめえで方を付けなきやいけね事もある。 だからよメテオラ、万事屋の坂田銀時としてその難題、一緒に解決してやるぜ。 それで三

日月、お前はどうすんだ?」

「ふむ、そうだな……」

湯呑みを口にし三日月は語つた。

「俺のいた世界、物語には過去へと遡り歴史を自分達の都合のいいものに変えようとする”歴史修正主義者”と言う連中がいてな。それに唯一対抗できるのが俺達、刀剣の付喪神である”刀剣男士”だつた」

「俺はジジイなので長い生きしてるからな。過去へと赴き、仲間達と戦いながら多くのものを見てきた」

眼を瞑り、過去の経験を思い馳せる三日月。

「夢を抱き、大志を掲げながらも叶えず倒れた者。多くの者に畏怖されながらも、呆氣ない最期を迎えた者。

己の理想とはかけ離れた場所に立ちながらも、人の為、世の為に奮闘した者」

「誰もが己の生を、今と言う刹那を駆ける姿を、俺達はこの眼で見てきた」

三日月は眼を開き、メテオラに顔を向ける。

「だからこそ俺は、俺達”刀剣男士”は、刹那を駆けた者達の命を守りたいと誓つたのだ」

「例えこの戦いが享楽の物語の一つだとしても、終わりの無いものだとしても」

「故にメテオラ、この三日月宗近も共に戦おう。この世界に生きる者達の刹那を、俺にも守らせてほしい」

深々と頭を下げる三日月にメテオラは頷く。

「感謝する、三日月殿」

「はつはつはつ、三日月で構わんよ」

そしてメテオラは皆の顔を見回しながら、

「セレジア、銀時、三日月、貴方達が元の世界へ戻れるよう、私は全力を尽くす。そして松原殿に、まりね、貴方達に改めてお願ひしたい。

私の見解では恐らく、最終的には『創造主』の力が必要だと考へられてる」

松原は首裏を搔きつつ、ため息混じりに答える。

「まあ、セレジアが帰れなくなつたら、俺は彼女抜きで話を書かなきや
いけねえからな。 そんな面倒は嫌だから、協力するぜ」

「私も、出来る事は少ないと思いますが、皆さんの為に頑張ります」
メテオラの手を両手で包むように握るまりね。

そんな光景を微笑ましく見る銀時は口を開いた。

「それで、これからどうすんだ？ その……軍服の女を探すのか？」

「いや、今現状において最優先にすべきは……」

その時、誰かの腹の虫が鳴り出す。

「まずは、腹ごしらえだな。 出前でいいか？」

松原は笑いを押さえつつ携帯電話を手にとつた。

○ ○ ○ ○

光源の少ない廃墟。 そこに2つの影が映える。

一つは黒いコートを羽織つた少し大柄の男性。

もう一つは対象的に細く背の低い、顔にマスクを付けた白髪の少年
であった。

「すみませんブリツツさん、こんな泥棒みたいな真似をさせてしまつ
て」

「なに、軍服の少女彼女に君の食事の件について頼まれてたまでの話だよ」
ブリツツと呼ばれる大柄の男は、少年に白い布で覆われたものを手
渡す。

「大学病院の解剖室からくすねたモノだ。 今はそれを大事に食べた
まえ」

「……はい」

少年はそれを手にその場を去ると、ブリツツは少し離れた柱の影を
横目で見る。

「騎士様か、なんのご用かね？」

「なに、先程までいた人喰い鬼の半人を警戒して今までの話だ」

その影から現れたのは金糸の髪を後ろに束ねた女性騎士、アリスト
リアだつた。

「あまりそう酷い事を言わないで貰いたいな。彼もまた、私達同様に『創造主』の手でイタズラに描かれた登場人物なのだから」

軍服の少女に、ブリツツは少年の事情を聞かされていた。

金木研。漫画『東京喰種トウキョウウガール』の主人公。

普通の人間だった彼は、人の姿をした人を喰らう化物『喰種グール』に遭遇してしまい、その都合で起きた事故により大怪我を負う。

その際に失った臓器の代わりに喰種の臓器を移植され、彼は『半喰種』となってしまった。

人肉しか食べられない絶望と、人間を襲いたくなる衝動に恐怖する金木は、人間社会に溶け込み暮らす喰種に救われる。

そこで彼は人を襲わずに生きる喰種達の姿を見て、少しづつ成長していく。

しかし、漸く手にした平穏な日常は、喰種撲滅唱える機関『CCG』と、災厄に等しい喰種チーム『アオギリ』によつて壊滅する。

人間と喰種。2つの価値観を持つ金木研は葛藤しながらも己が信念を貫いたが……。

「彼程、自分の世界を恨み、呪つた人間はいない。彼はこの世界を壊し続けるだろう……、自分の身も含めてな」

「悪いが、貴様と問答を交わすつもりは無い。私は一刻も早く己の世界へと戻り、祖国を救済せねばならんのだからな」

アリストリアがその場を去ると、ブリツツは上を向き自分のいた世界を思い出す。

「生まれた世界と『創造主神』が違えども、最近の若者はせつかち過ぎる」と私は思うよ、カンナギ」

第九訓 その場の勢いに乗つて行動しない！

リビングのテーブルに並べられた出前の数々に、各自手を取りながら銀時達は今後の方針を検討していた。

「ところでよ、その軍服のなんちやらつて奴、どんな奴なんだ？ 僕は一度も会つた事ねえからよく解んねえけど」

銀時は出前の寿司を口にしつつセレジアに問う。

「はつきり言つて、嫌な奴よ。 人の心中にズカズカ入つて言いたい放題」

「戦闘能力も極めて高い。 数百にも及ぶ軍刀を大量に召喚し、意思を持つた弓矢の如く襲いかける。 確証はないが、まだ何か特殊な力を秘匿してゐるもよう」

「そうよ！ 私のフォーゲル・シユヴァリエ、そいつに壊されちゃったし！」

「マジでか?!」

セレジアの発言にショックを受ける松原。

それを横目に見つつ颯太は三日月に言葉を投げる。

「三日月さんは会いましたが、彼女に？」

ああ、と三日月は湯呑みを手に話を続け、

「長生きしてゐる分、人を見る目はあつてな。 僕の読みが正しければ、あれは恨みを秘めた幼子だ」

「恨み……ですか？」

「余程、この世界に対して強い恨みを抱いてゐるとみえる」

それを聞いたメテオラは一度思考した後、颯太に提案する。

「颯太殿、出来れば銀時達の為に彼女の相描きをお願いしたい」

「ぼつ、僕ですか？ そんな、プロの人の前で絵なんて……」

「いいんじやねえの？ 一度プロに見せて貰つて、少し指導されるのも良い経験だぜ」

「あつ、私も、颯太君の絵を見てみたい！」

「はつはつはつ、責任重大だな、颯太。 気張れよ」

渋々と颯太は渡された白紙に彼女の相を描きだした。

顔の輪郭から眼、鼻、口、耳と描いて行き、最後に髪型と一部の飾りをまとめて描き終える。

描かれたのは軍帽を被つたツインテールの少女の人相に、セレジアはわつ、と感嘆の声を漏らす。

「すごい、あいつの特徴がよく捉えて上手く描けてるじゃない！」

「いや、プロに比べたら僕なんて……」

謙遜する颯太を横目に銀時は人相書きを手に取った。

「これが俺達の倒すべき相手、な」

「現状、この世界と矛盾する能力を持つ者達が現界し続け、世界の侵食が加速しつつある」

「その女が事の発端つてぐらいしか、私達は知らないわ。 手掛かりとして、現界されてる人達に聞くしかないけど……」

「では、どうやって其奴らを見つけ出す？」

皆が思い悩む中、携帯電話の着信音がリビングに響く。 松原のだ。

「はい、松原です。 ……えつ」

電話に出た松原は顔をしかめながら話を続け、「それで……、解つた。 すぐそつちに向かう」

電話を切つた松原はセレジア達に朗報を口にした。

「俺の知り合い、アニメ脚本家の中之鐘の家に作品のキャラが現れた」「言つてた側から出やがつたな、コンニヤロー」

「中之鐘つて、スタジオアーバンの中之鐘昌明さんですよね！ 『無限神機モノマギア』の！」

「その主人公とロボット」と、こっちの世界に来たみたいだ

それと、

「もう一人と、もう一機いる」

○ ○ ○ ○

「今から同じ事情を知る人達が来てくれるから、ちょっと待つてね」「はーい」

座敷のテーブルにて、中之鐘が買ったコンビニ飯を頂く灰色のパイ

ロットスーツを着た活気のある少年。

中之鐘が脚本したロボットアニメの主人公『鹿屋瑠偉』であった。

そしてもう一人、テーブルの横に座る者がいる。

鹿屋とは対象的に静かで、身の丈の合わない大きい緑のコートを羽織った少年だ。

彼はコンビニ飯に手を付けず、自身の両手を見つめ硬直する姿に鹿屋は口を開く。

「どうしたの？ 食べないの？」

「……阿頬耶識なしで、右腕や両足を動かすのは久しぶりだから」

握り、五指を広げる。

その動作に懐かしさを思い出しながら呟く彼は、改めて目の前のご飯に手を伸ばした。

「ねえねえ、君の乗つてたロボット、僕にも乗せてくれない？」

「別に良いけど、多分動かせないと思うよ、俺のバルバトスは」

中之鐘の自宅近くにある雑木林。

そこに2つの巨怪の姿があつた。

神の名と、悪魔の名を冠するロボットである。

第十訓 結婚してもしなくても男には墓場！

東京郊外にある中乃鐘の自宅へと向かつた銀時達は、そこで新たに現れたキャラクター達と会合した。

「それで、彼らがそう見たいだな」

「す……すみません……」

「……どうも」

松原は畠部屋にて座る二人の人物を見た。灰色のパイロットスーツの気弱そうな少年と、背丈よりも大きい緑のジャケットを着た気丈な少年である。

「それで、こいつらは一体なんのキャラなんだよ、颯太？」

「えっと、彼はそちらにいる中乃鐘さんが脚本したロボットアニメ『無限神機モノマギア』の主人公、鹿屋瑠偉です」

そしてもう一人は、と颯太は気丈な少年を指した。

「中乃鐘さんが構成を担当した、『機動戦士ガンダム 鉄血のオルフェンズ』の主人公、三日月・オーガスです」

「なん……だと……」

驚愕し膝から崩れ落ちる銀時。

「ちよつ、どうしたのよ、銀時？」

「馬鹿野郎、ガンダムとか俺のアニメ制作会社の古株じやねえか！」

それと比較しちまつたら『銀魂』なんてチ○カスだぞ、コノヤロオオオオオ！」

「銀時、その場合だと貴方を演じた小〇旬にもあらぬ弊害が生じる。ここはこの国の言葉である月とスッポンから、自身の作品がスッポンの位置に考えるといい」

「スッポンはスッポンでも、酔っ払ったマダオのスッポンポンと汚しゃく物が炸裂する作品をガンダム様と比べていい訳ねえだろおが！」

「本当にあんたは一体どんな世界から来たのよ!?」

騒ぐ銀時達を余所に呆れつつ、三日月・オーガスは中乃鐘に問う。「それで、ここどこのなの？」

「そつ……、そうです！　ここはどこなんですか？　僕のいた日本っぽいですけど……、もしかして過去ですか？」

続けて鹿屋も問うと、答えづらい中乃鐘の代わりにメテオラが口を開いた。

「違う。二人の世界の歴史と、この世界の歴史に繋がりはない。あなた達一人一人の世界は、総て創造主の手により完全に独立したものの」

「え、つまり……どういう事なの？」

「もつと解りやすく言つてくれない？」

彼女の固く難しい口振りに混乱する一人に、三日月宗近は解釈する。

「ようするに、お前達の世界を一つの絵物語の本だと考える。その中からお前達は飛び出し、描き手側の世界に来てしまったのだよ。俺やそこにいる三人のようにな」

頷いたセレジアはまりねと共に、彼らが載っているアニメ雑誌などを二人に見せた。

「なつ、なんですかこれは！　えつ、これ僕なの?!」

「……ふーん」

雑誌を手に仰天する鹿屋に対して、興味無さげに雑誌を捲る三日月・オーガス。

「それで、中乃鐘さん。彼らとはどこで？」

「ここだよ。自宅で『モノマギア』のオンラインアを観てたらテレビ処か部屋中に変なノイズが走つて……」

異変を感じた中乃鐘はテレビを再度観ると、黒いロボットと白いロボットが軍服の少女と戦つており……、

「ヤバイと思つてテレビを外に放り投げたら、そこからギガスマキナとバルバトスが飛び出すように現れたんですよ」

「あの、警察は呼ばなかつたんですね」

「そんな余裕ある訳ないですし、あれらが暴れたり人目についたら、会社にクレームどころの話じや済まないぢやないですか!!」

「そりやあ……そだよなあ」

半泣きする中乃鐘に同じクリエイターとして同情する松原とまりね。

「鹿屋君だつけ、あなたの方は?」

「電磁寄生体^{アメイジオーン}との戦い前のアラートだつたんですけど……」

鹿屋はセレジアの問いに答えて三日月・オーガスを横目にし、「いきなり変な女の子と同時に、白いロボットが出て来たんですよ。最初は敵の新型かと思つて戦闘になつて……で、気が付いたらここででした」

「そう。あなたはどうだつた? えつと……三日月君だつけ」

「んつ、呼んだか?」

「ジジイのお前じやなくて、ガンダムの方だよ。同じ名前のが二人いるとか面倒くせえな、コンニヤロー!」

「……ミカで良い。オルガは俺をそう呼んでた」

三日月^{ミカ}はため息をつき、

「俺もよく覚えてないけど、そいつが言つたとおり急に戦闘になつて、気付くとそここの太つた人がいた」

「太つたは余計だよ!」

「ここに飛ばされてから、もう一度彼女に会つた?」

「いや、知らないけど」

突つ込む中乃鐘を無視しつつ会話を進めるセレジアと三日月^{ミカ}。

「けど彼女が目的を遂行するには、キャラクター達の存在が不可欠」
「すると、マジカルなんとかつて子とか騎士も」

「変わった銃を使うあの男も」

「あの人柱力まがいのガキもかよ」

「向こうにつく者達は皆、ここに来る可能性は高い。彼女は私達がここに来ることも想定の筈」

銀時達はこの世界で戦つた相手を思いだす。

「あの、もしかしてまだ何か起きるんですか?」

「世界存亡の危機らしい。諦めろ、俺はもう諦めた」

色々とな、と中乃鐘の肩を叩く松原。

そしてセレジアは鹿屋達に告げる。

「ことの元凶は全部あの女の仕業よ。 そしてあいつはこれからこの世界……そして私達がいた世界全てを壊そうとしてる。 メテオラの予測だと、あいつは自身の計画に反抗する存在を消す可能性があるって事なのよ」

しかし、状況が激変し続けることに鹿屋は許容できず立ち上がり、「いい加減にしてくれよ!! もうあなた達が何を言つてゐるのか、僕にはさっぱりだ！ 今までだつて、僕は酷い争いを強いられて来たのに、またここでも命懸けな目にあわなきやいけないなんて、もううんざりだよ！」

激昂する鹿屋に中乃鐘は頭を抱える。

「ああ、始まつた」

「設定通りの逆切れつぶりだな、 おい」

「もう結構です、こんな訳の解らない話は！」

更に激昂する鹿屋は隣の部屋へと行き、

「この世界が滅ぼうがどうしようが僕には関係ない！ 僕のことは放つておいて勝つてにやつてれば……」

「ねえ、ちょっと聞いていい、 太つた人」

三日月^{ミカ}の唐突な問いかけに中乃鐘は一瞬戸惑う。

「なつ、なんだい、 三日月君」

「俺が死んだ後、 鉄華団の皆は無事なの？」

その言葉は銀時達の顔色を蒼白させた。

「しつ、死んだつて……」

「颯太殿、 どういうことか説明を」

「……彼、三日月・オーガスは最終回で、仲間達を敵から逃がす為の囮として戦つて……命を落としました」

颯太の口から語られる三日月・オーガスの物語に一同は口を閉ざすも、

「俺のことはどうだつていい……。 でつ、 どうなの？」

そんなことは無関心に三日月^{ミカ}は再度中乃鐘に問う。

その鋭い視線の中乃鐘は息が詰まりそうになるも、

「……生きてるよ」

息を絞り出すように答えを返した。

「彼らは生きてる。 生きて、自分達の人生を歩んでいるよ」

「そう……。 えつと、そこの赤毛のあんた、名前は？」

「セレジアだけど……」

名を聞いた三日月^{ミカ}は銀時達の正面に向き、

「力いるなら……手を貸すよ。 荒事しか役にたたないけど」「なつ……！」

「ちよ、ちよつと待つて下さいよ！」

しかし納得がいかない鹿屋が戻つて三日月^{ミカ}に詰め寄り、

「あなた、死んだんでしょ！ なのにもう一回死ぬような目に会いに行くなんておか……」

「煩いな……」

「痛だだだだつ……！ 折れる、折れますっ！」

掴みかかろうとすると、三日月^{ミカ}は直ぐ様その手を片手で取り押さえ強く捻つた。

それを銀時は言葉で静止を促し、皆の気持ちを代弁する。

「おい、そこまでにしておけ。 マジで折れるし、鹿屋とかの言い分も大体解る」

だから、

「説明してくんねえか？ どうしてそんな考えになつたのかをよ」

「別に、俺は自分を犠牲になんて思つてないよ」

鹿屋の手を離し、三日月^{ミカ}は己の心情を語つた。

「俺の仲間に昭弘つてのがいてさ、あいつが言うには”人間は死んだら新たな命になつて生まれ変わる”……転生つて言つてたつけ」

「最初はさ、また皆に逢えると思つて少し期待なんかしてたけど……やつぱり死んだ人間が、生きてる人達に逢えないのは直ぐに解つた」「それに、あいつらはもう自分達の道を歩んで、そこで新しい自分達の居場所を作つてるなら、尚更逢いに行つちやいけない」

けど、

「それを壊そくとする奴がいるなら、俺は今あるこの命を、あいつらの

居場所を守る為に使いたい。それが、俺の決めた答えだ」

銀時は目の前にいる三日月が、自身を写す鏡のように思えた。

姿や形の話ではなく、その心が、魂が、あまりにも己に酷似しているのである。

そして理解した。彼は仲間の為なら受ける傷が重からうが一人で進み続け、やがて壊れてしまうのだと言う事を。

「……つたく、主人公つて奴はどういつも似たようなキャラ付けが多すぎるんだよ、コノヤロウ」

はあ、と一息つくと銀時は三日月に手を差し出す。

「まつ、ちよつと長い付き合いになりそうだけど宜しくな。俺は坂

田銀時、銀時でいいぜ」

「ああ、よろしく、銀時」

そして三日月はその手を握り返すと、隣で手を抑えて疼くまる鹿屋を見た。

「それで、あんたはどうするの？ 戦うの、逃げる……」

「戦いますよ、戦えбаいいんでしょ！ ここで空氣読まずに逃げたら、僕が馬鹿みたいじやないですか！」

またも逆切れになる鹿屋だが、決意は定まつたようである。

「くつそお……、絶対に生きて返つてユイナちゃんとデートしてやるう……！」

「ユイナちゃんつて？」

「ヒロインですよ。鹿屋君が片想い中の」

「男としちゃ、童貞のまま死ぬなんてご免だらうよ。セレジア、後で胸でも揉ませてやれ」

「うるさい死ね、プータロー！」

「では、私の胸を……」

「お前、揉めるほど胸な……ぐほつ！」

銀時の悪ふざけに呆れるセレジアに、軽はずみな発言に彼の鳩尾に拳を叩きつけるメテオラ。

「結構です。僕、歳下が好きなんで。 やるなら彼にお願いします」
「いや、俺……もう妻アトラがいるから」

……。

「はああああああああつ?!」

銀時及びキヤラクター達は三日月^{ミカ}の発言に度肝を抜かれ叫びだす。
「妻つて、えつ、結婚してんの、お前!」

「ほうほう、中々やるな」

「うつ、嘘だあー!」

「颯太殿、これは私の魔導師人生を越えた衝撃。 詳しい説明を」

「なつ、何言つてるのよ皆。 こつ、こんなの、男の子が一方的に相手を俺の嫁つて……言つてるだけでしょ。 そうよね、颯太君?」

それぞれ特有に驚くも、真実なのかと颯太や作家達に問う銀時達。 答えは……、

「さつ、最終回手前の話で……」

「いたしちやつて……るんですよね」

「子供も……いるもんな」

「しつ、新婚合体G〇旦^{ミカ}那あああああつ?!」

謎の言葉を残し倒れる銀時とメテオラ。

セレジアは恐る恐る三日月^{ミカ}聞き出す。

「いつ、一応聞くけど、あなた……歳はいくつなの?」

「十八だけど」

「……相手の方は?」

「十四ぐらい」

「じゅ、十四歳の母あああああつ?!」

続いてセレジア・ユピティリア（十九歳）もまた、膝から崩れ落ちた。

そんな光景に取り乱す颯太。

「ちよ、大丈夫ですか皆さん!」

「やつぱ……すげえよ、三日月^{ミカ}は」

「もう、チーズ蒸しパンになりたい」

「歳下の子に、先を……越された……」

「はつはつはつ、これはまた重症だな」

「笑つてないで手を貸して下さいよ、みか……じゃなくて宗近さん！」

笑う三日月宗近に助けを乞う颶太の横で、

「三日月さん、師匠と呼んでいいですか」

「……なんか、更に鬱陶しくなった」

鹿屋は三日月^{ミカ}に対して謎のあこがれが目覚めていた。

銀時達の心労が完全に癒えるまで、数分もの時間が過ぎる。

その影で新たに動く者達に気が付かず…。

第十一訓 口ボツトは男の子の口マンで異論は無い！

三日月・オーガスの爆弾発言に氣絶仕掛けっていた銀時達が回復した頃、外では小雨が降つていた。

「それで、これからどうするんですか？」

中乃鐘の自宅の一室にて車座になる一同は、まりねの発言から今後の方針を思案しだす。

「どうするつて言われてもな」

「メテオラ、お前はどう考えている？」

「まず、この現状において一番の攻略の鍵は軍服の少女」

三日月宗近に問われたメテオラは、手にある菓子袋を一つ口にしてから語り出す。

「彼女もまたこの世界の者ではない。 私達と同様に、彼女を創った者がこの世の何処かにいる」

「そいつを殺せばいいのか？」

「ぶ、物騒なことは言わないで下さいよ、三日月さん」

「おい中乃鐘、このガンダム主人公の思考回路どうなつてんだ、コノヤロウ」

「そういう設定なんで……」

「その設定を書き換えることが出来る人間……俺達みたいな『創造主^{クリエイタ}』を死なせてどうすんだよ」

メテオラは再度話を続ける。

「改変は私達だけでは不可能。 だが、銀時の発言より導きだされた『承認力』を行使することで、改変の成功率は高くなる」

「『承認力』？」

「創作された物語を見る、読者、視聴者、その評価から得られる絶大的な支持の力。 それさえ在れば改変も可能と私は考える」

「だから、

「創作物に関してあなた達の力は不可欠。 まずはこれから……」

突然、メテオラは口をつぐんで己の腕を見た。

そこには着けてたブレスレットの宝珠が赤く明滅しており、
「周辺に張っていた接触結界が反応している」

「もしかしてあの女ですか？」

「違う、これはっ」

「下がつてろ、お前ら！」

「メテオラ！」

銀時とセレジアが木刀それぞれの愛刀と長剣を引き出し警戒すると同時に、ブレー
カーが落ち視界は闇に包まれる。

その瞬間、轟音と共に闇に紛れて迷彩服の集団が、窓やドアを突き
破り銀時達に襲いかかつた。

「ジジイ！ 三日月！ 輻太達を頼む！」

「了解した」

「わかつた」

「待つて、殺してはいけない！」

三日月宗近と三日月・オーガスもまた臨戦姿勢を取ろうとするも、
メテオラの声がそれを静止させる。

直ぐ様、三日月宗近は腰の刀を鞘さやごと抜き、目の前に現れた者達へ
と一人づつ振り下ろす。

三日月・オーガスもまた懷に隠し持つ拳銃から手を離し、格闘で応
戦する。

戦闘が可能なキャラクター達は、輻太達一般人を守るように防戦す
るも、

「痛ええ！ 離せつて！」

「三班！ マルタイフタ、確保！」

「松原！」

既に取り押さえられた者もあり、鹿屋も遂に痺れを切らし、

「来い、ギガスマキナああああ！」

腕に装着していたインタークームを起動させた。

「ちよつ、待つて鹿屋くつ……！」

中乃鐘の静止も虚しく、野外の雑森林から轟音と震動が此方へと響

き、

「伏せろおおおおおっ！」

家に衝撃が走る。

その場の全員が見上げるとそこに天井はなく、屋根もなく、此方を見下ろす黒塗りの巨大口ボットの相貌があつた。

「はつはつはつ、デカいな」

「おいジジイ、呑気なこと言つてる場合かバカヤロウ！」

木刀にて相手を捌きながらも、余計に事態が悪化する状況に顔色を強張らせる銀時。

鹿屋が呼んだギガスマキナも、空に展開されていた攻撃ヘリの機関砲の的となっていた。

どうする……！

「静まりなさい!!」

声が。 声が響いた。

無数のライトの光がその発した場所を照らす。

「私達は抵抗しない！ あなた達も武器を下げるがいい！」

メテオラだ。

その小さな駄から、いつたいどこから出るのかと思う凜とした言葉が、この場を制した。

「鹿屋、ギガスマキナのオートドライブを今すぐ止めて！ 皆も武器を下ろして！」

「でも！」

「停止を！」

彼女の剣幕に圧され、鹿屋はインターフォンを操作する。

ギガスマキナの停止と銀時達の手から武器が無くなつた事を相手が確認すると、

「総員、銃を降ろせ！」

此方に円陣状で銃口を向ける者達の中から一人の男が現れた。

「無礼をお詫びします。 陸上自衛隊中央即応集団特殊作戦群、特戦第一中隊の真垣三等陸佐です」

メテオラは顔を上げ、

「この歓待の理由をお聞かせ願いたい」

「現在我々は、特別事態の対処として、内閣府危機管理室からの要請に基づき行動しております」

続けて、

「ご同行願えれば、そちらで詳しいお話を」

銀時達は、此方を向いたメテオラの視線に頷き返す。

「私達全員一緒が条件です。各人個別の尋問は許しません」

○ ○ ○ ○

ヘリコプターにて霞ヶ関へと送られてる銀時達は、各々現在の状況を考察したり、現実逃避したりしていた。

「なあ、メテオラ。大体の経緯に心当たりあるか?」

「彼らは今まで私達の動向を監視していた。恐らくは、鹿屋殿とオーガス殿が乗つて来た巨大ロボットが現れた事により事態が急変したと推測できる」

「ほつ、僕達のせいですか」

「それで、これから私達はどうなるの?」

「彼ら自衛隊の指揮を行つたこの国の上位階級より、私達の存在の解明と原因の追求を行われる」

故に、とメテオラは続けて話す。

「私達は軍服の姫君の危険性を告白し、彼らに助力を得られるよう対話しなければならない。その為にも彼らから信頼を勝ち取れる様、各々は軽率な行動を取らぬよう注意するように」

その言葉を告げてから數十分程、

「メテオラ・エスター・ライヒさん、あなたには刑法上器物損壊と強盗の罪があります」

メテオラは冷や汗を搔きまくっていた。

「何やつてんだメテオラアアアアア!!」

第十二訓 ガチャヤで失つたお金は戻らない！

「初めまして。私は特別事態対策会議室の菊地原と申します」

へりで内閣府合同庁舎に到着した銀時達は、自衛隊につれられて広い会議室に通された。

そこで皆はスーツ姿にメガネの女性、菊地原と名乗った者が先程まで自衛隊の指揮を統括していたと理解する。

続けて新たに現れた背広や制服の官僚達の紹介を終え、

「それでは本会議を始めさせて頂きますが、宜しいでしょうか？」

銀時達は互いの顔を見合わした後、代表としてメテオラが手を上げる。

「こちらは特に構わないが、何か飲み物をお願いしたい。出来れば

新作『濃厚果汁200%ピーチ味』を

「俺はイチゴ牛乳」

「コーヒーをお願いするわ」

「ほうじ茶を一つ」

「何でもいい」

「あ、じゃあ僕はコーラで」

「お前らこんな時に……」

呑気に飲み物を要求するキャラクター達にツッコむ松原。

そんな光景に苦笑いする颯太と他作家達だったが、そのやり取りで顔の緊張が少し解れた。

そして、

「では、飲み物が用意できる間に此方からの情報伝えましょう」

菊地原の司会にて会議が始まった。

○ ○ ○ ○

銀時がこの世界に来る前、キャラクター達による戦闘が世間で噂になるが、当初はいたずらなどの風聞だと警視庁は判断していた。だがある事件にてそれが事実だと認識し、警視庁は正式な捜査を開始する。

その事件とは警視庁にとあるキャラクターが突如強襲をかけたのだ。

警視庁に逃げ込んだ自身の『創造主』を得る為に。

「漫画家、宝田直也さん。 ペンネームは高良田概さん。 ご存知でしょうか？」

「知つてます、月刊チューズデーで連載中の『緋色のアリステリア』の作家です。 ……まさか？」

颯太が口を開くと菊地原は頷き、

「警察署にて保護を求めて出頭した高良田氏は、後から出没した女騎士、自身の作品のキャラクターのヒロインであるアリステリア・フェラリイに拐われました」

「マジかよ……」

項垂れる松原を横目につつ銀時は用意されたイチゴ牛乳を一口する。

重軽傷者まで発生した事件がただの愉快犯なものではなく、アニメ漫画のキャラクター達がその能力を持つたまま都内に出現する事態に政府も動搖した。

以後、政府はキャラクター達を『被造物』と呼称し、都内全域にて捜査網を展開する事となり、

「そして今回の巨大駆動体……ロボットが現出した事により政府は迅速な対応として、自衛隊による非常措置を探らせて頂きました」

「確かに、あなた方からしたら妄想が現実世界に具現し、市民に脅威を及ぼす可能性を鑑みてその行為に及んだのなら、此方側としては納得は出来る」

しかし、とメテオラは続けた。

「今回の事態が起きるより前に、私たちへ何らかのアプローチをする事が出来た筈では？」

「それは、警視庁襲撃とは別に十条駐屯地内における自衛隊官給品盗難の件があつたからです」

「盗難？」

セレジアが首を傾げると、菊地原の背にあるプロジェクトナーにある

映像が写しだされた。

それは……、

「警視庁襲撃事件の前の日に、十条駐屯地法務部から防衛省へ報告に上がった写真です」

駐屯地上空にて飛行する緑色のロープを纏つた銀髪の少女の姿である。

『メテオラじゃねえかよ!』

思わず叫んだ銀時達はその当人に視線を向けると、

「それは、メテオラと断定するにはあまりにも明らかすぎた。 美しく、可憐で、気高く、そして聰明すぎる私の姿だつた」

「ベル○ルク風のナレーションで後悔してんじゃねえよ!」

「駐屯地の補給廠に保管されていたATM5対戦車ミサイル六基。 MINIMI多用途機関銃一挺及び実砲一ケース。 MK26手榴弾を一ケース。 そのうちのATM5は、清水公園での乱闘にて全六基が使用されました」

「なあ中乃鐘、それってどんくらいすんだ…?」

「ぼ、僕ら国民の血税のうちの一億円以上かな……」

兵器関連の知識がある中乃鐘は松原の問いに苦笑いした。

菊地原はメガネをかけ直しメテオラを見つめる。

「メテオラさん、あなたは現状にて刑法上器物損壊と盜難容疑であり、民法上では賠償請求の対象になります」

「勝手に使つてごめんなさい」

メテオラは深く頭を下げた。

○ ○ ○ ○

その後、銀時達は菊地原と列席している官僚達にメテオラの仮説である『大崩潰』を説明した。

信憑性に欠ける話だが、それに生じた二次被害が現実に起きてる以上、静観する事は出来ない。

対応策として四つ、メテオラは掲示した。

一つ目は、新たな『被造物』達、その創作者の搜索と保護する事。

二つ目は、『被造物』との直接対峙には銀時達『被造物』が対処する事。尚、その際は住民への動搖を防ぐ為の隠蔽工作が必要とされる。

三つ目は、『軍服の少女』の搜索と、その創作者の特定の急務だ。そして最後は、

「私達がこの世界で行動する為に、身分の保証をお願いする」

「解りました。メテオラさん達には在留外国人職員としての身分証を発給します。それに関する詳しい話は会議の後に文書として配りますので、必ず目を通してサインを」

感謝します、とメテオラが頭を下げる。銀時達も席を立ち上がり釣られて動く。

会議終了後、銀時達は休憩やトイレに立つたり、官僚の一人から写真撮影を求められたりしていた。

また、鹿屋や三日月・オーガスは自身のロボットについての所在の説明を受ける。

「少し、お話しをよろしいでしょうか？」

まだ会議室の席に座っているメテオラに菊地原が問う。

「一つだけ聞かせて下さい。あなた達は、最終的にどのような方法で事態を収束させるのですか？」

メテオラは手にある缶ジュース『濃厚果汁200%ピーチ味』を一飲みし、

「この世界の創造力と意志が、私達の世界を形にした」

ならばこそ、

「最後の解決もやはり創造力と意志に他ならない」

「つまりはクリエイターの力が必要、という事ですね」

「私達『被造物』が出来る能力の範囲は、物語で描かれたまでしか出来ない。きっと、全ての決着を着ける時、あなた方の創造力が鍵となる」

そうですか、と菊地原は笑う。

「それは悪くないです。だとするなら、我々もそれ相応に頑張ら

なければなりません

「あなたと会つて、ようやく笑つた顔をみた」

「そうですか？　でも、あなたの笑みも素敵ですよ」

「……私は、あまり笑うのには慣れていない」

「それはお互い様ですよ」

手洗いと写真撮影を終えた銀時とセレジアは、会議室にて談笑する二人を見つける。

「なんか知らねえうちに仲良いな、あいつら」

「でも、これから一緒になつて世界を救うんだから、良い事なんじやないかしら」

「世界を救うねえ……、あんまし実感ねえけど主人公のやる事なんて大体それだもんな」

だからまあ、

「やつてやろうぜ、セレジア。　そして五体無事に元の世界に帰んぞ」「当たり前よ。　でもその前にお腹減つたつて煩い鹿野くんを黙らせないと」

「安心しろ。　今さつき二日月^{ミカ}に頼んで鹿野にアームロックかけてつから」

二人の背後から断末魔の叫びが木靈した。

「……次に会う新しい『被造物』、優しくて争い事を好まない事を祈りたくなつたわ」

○ ○ ○ ○

夜の摩天楼にそびえ建つビルの屋上。

そこに一つの影が映えた。

「僕は……帰つて来れたのか……、地球上に……」

それは齡五十代の男であり、身に付く衣服はズボン一着のみ。

そして、

「万理江……麻理……剛史……はな子、お父さんは……帰つて来れたんだよなあ……」

その優しい相貌の眼からは、普通の人間にはない機械の光が灯つていた。

第十二訓 優しいよりも、強いよりも、自分らしく。

夜。

とある高架の脇にある小さな児童公園にて、一つの影が見える。
金糸の髪を後ろで束ねた軽装甲の女騎士、『被造物』であるアリステリア・フェブラリイだ。

身に付けていた鎧は傍に積み、己が作ったかまどを前に野営していた。

また新たに、一人の人物がかまどに照らされる。

「其処許か」

アリステリアの前に現れたのは学生服の少女、同じ『被造物』の煌樹まみかであつた。

「ダメだよ、アリスちゃん。公園で無断キャンプなんて」「あるものは使うまでだが?」

「アリスちゃんがどんな世界から来たかは解らないけど、ある程度はこの世界のルールを守らなきゃダメ」

まみかの叱責にアリステリアは顔をそらす。

「あつ、そうだ。こんなのが買ってきたんだよ」

アリステリアの隣に座り込んだまみかは、持っていた紙袋から箱を取り出した。

それには彼女と瓜二つの少女がプリントされており、『マジカルスレイヤー・まみか カレーの甘口』と書かれている。

「其処許だな」

「見かけたら嬉しくなつて、つい買っちゃた。これを見ると、私が『物語の登場人物』なんだつて思うよ」

「……ああ、嫌にでもな。まみか、其処許はある『軍服の姫君』の言葉を信用できるか? 世界の『改変』を」

唐突なアリステリアの問いに、まみかは膝を抱えてかがり火を見つめた。

「私の世界、物語にはアクマリンって悪い敵がいるの。『微笑みの力』を守る為に、私と大切な仲間達と一緒に戦つてたんだ。辛い事

や悲しい事もあつたけど、皆が支えてくれたお陰で今の私がいる」「では、其処許の願いは『改変』にてその宿敵を消そうと？」

「ううん、私はそれを望まないよ。私の世界の、私の物語の問題は私の力で解決しなくちやダメ。私はただ、あの子が私に助けを求めてくれたから、それに答えるだけだよ」

アリスティリアちゃんは？ と、まみかは隣にいる女騎士を見る。「私は王の娘として、王国と民をウンターヴエルトの軍勢から守る為立ち上がった。だが、無尽蔵な魔物共の猛攻に国は疲弊していくばかり。その最中にてあの女が現れた」

アリステリアはその時を思い返しつつ、枝をかまどの火にくべた。「創造主に運命を変えさせる……、そう言つて私をこの世界へと連れて来た。あの時は悪夢に思えたよ。私の記憶にあつた国も民もその全てが絵物語に過ぎなかつたと」

「アリスちゃん……」

「例え私の世界がこの世界の道楽の一つだとしても、私は私の世界を救つてみせる！」

手にしていた枝を握り潰しまた火にくべるアリステリアに対し、まみかはある事に気づく。

「王の娘つて事は、アリスちゃんつてお姫様なの？」

「確かに私は神聖ウルターシュタインの姫であるが、騎士として戦場に赴いた時から女である事を捨てた身だ」

「うーん……でも、見てみたくなつたな私、アリスちゃんのドレス姿。きつとすごく綺麗なんだと思う」

「茶化さないでくれ……」

剣幕した雰囲気から打つて変わり、女同士による談笑が園内に木霊すると、

「あの、すみません」

一人の人物が彼女達に近づいた。

まみか達が振り返ると、そこに立っていたのは衣服がボロボロの五代位の男。

男は何やら困った顔で二人を見る。

「道をお聞きしたいのですが……」

彼女達は気づく。

彼もまたこの世界とは違う物語の世界の登場人物であると。

「あの、失礼ですがお名前をお聞きしても宜しいですか？」

まみかが問うと、男は少し困惑するも優しく答えた。

「えつと、僕の名前は犬屋敷壱郎と言いますが……」

○○○○○

被造物対策本部が開かれてから翌日の事、

「颶太の様子がおかしい？」

松原の仕事部屋にて寛ぐ銀時と宗近達は、来訪したセレジアの言葉に眉をひそめる。

「そうなのよ。顔見せに彼の部屋に入つたら何かそわそわしてたから」

「そりや思春期の男子の部屋に突然入つたお前が悪いわ。あんぐらいの歳の男はベッドの下やPCフォルダに性欲をひた隠し、誰もいな伊斯キ見て利き手動かしてんだからよ」

「はつはつはつ、颶太も男であるからなー」

「あなた達に聞いた私が馬鹿だつたわ……」

頭を抱え呟くセレジアは、自身の所持する携帯の着信音に気付く。

この携帯は政府より、緊急時の連絡用として渡された物だ。

「どうしたの、メテオラ？……解つた！ 銀時と宗近も一緒だから直ぐに行く！」

「おい、セレジア。何があつた？」

先程とはうつて変わった剣幕な表情に銀時達も動搖する。

「メテオラから、新しい『被造物』が現れたって。どうもヤバイ奴が来たみたいなのよ」

つづく

